

不登校児童生徒を対象とした宿泊体験活動の 心理教育的援助サービスと教育的意義に関する研究

A Study on Psycho-educational Support Services and Educational Significance of Group Activities Involving Accommodation for School Refusal (Non-Attendance at School) Children and Students.

中村 豊^{a)} 藤崎 育子^{b)}
NAKAMURA Yutaka Fujisaki Ikuko

要旨：兵庫県立但馬やまびこの郷は公的教育相談機関であり、不登校児童生徒の宿泊体験活動のプログラム（4泊5日）を有するユニークな施設である。この先駆けとなる不登校児童生徒の宿泊体験活動を合宿として取り組んできたのが開善塾教育相談研究所である。本論文では、開善塾教育相談研究所がこれまでに取り組んできた合宿に注目し、家庭から合宿参加までどのように不登校生徒をつなぎ、どのような効果を機能させているのかについて検討した。研究方法はエスノグラフィーにより、参与観察者は第2筆者及び第1筆者である。分析の結果、参加者の多くは、リアルな生活における様々な体験活動をとおして自信を高め、自尊感情をはぐくむ効果が見られた。

キーワード：不登校、ひきこもり、合宿（宿泊体験活動）、教育相談

1 問題と目的

近年の不登校児童生徒は、「不登校」として統計を取り始めた平成3年度以降増加を続け、令和元年には千人当たりの不登校児童生徒数が最高値を更新している。文部科学省（2020）によれば、「小・中学校の長期欠席（不登校等）の状況」について、不登校児童生徒数は181,272人（小学校53,350人・中学校127,922人）であった。この人数は「令和元年度学校基本調査」（2020）の都道府県別在学者数統計を参照すると、児童数53千人は、ひとつの県の全児童数以上に当たる（12県が該当する）。中学生127千人は、四国4県の全生徒数126千人を超える。この不登校児童生徒の詳細な状態について見ていくと、義務教育段階の学校で90日以上欠席している割合は、小学校で約42%、中学校で約61%である。また、学校外で何らかの相談等、心理教育的援助サービスを受けている者が約36%、学校内では約47%と半数にも満たない。このことから、不登校児童生徒らには、必要とされる相談や心理教育的援助サービスが十分には行き渡っていないことが示唆される。

半面、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（平成28年法律第105号、以下「法」と表す。）が施行されたことに伴い、学校復帰が不登校児童生徒の最終的なゴールではなくなった。学校には、法第3条に規定された基本理念を踏まえ、「個々の不登校児童生徒の状況に応じた必要な支援」や「国、地方公共団体、教育機会の確保等に関する活動を行う民間の団体その他の関係者の相互の密接な連携」が求められるようになってきている。しかし、文部科学省（2020）の調査結果に

^{a)} 東京理科大学教育支援機構教職教育センター ^{b)} 開善塾教育相談研究所 所長

よれば、「不登校児童生徒への指導結果状況」において、「指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒」は、国公立私立合計で小・中学校ともに22.8%であった。このことから、不登校児童生徒の学校復帰は相当に困難であることが示されている。また、「指導中の児童生徒」の内、「継続した登校には至らないものの好ましい変化が見られるようになった児童生徒」は、国公立私立合計で小学校23.2%、中学校23.3%であった。この現状を改善していくため学校には、新たな不登校児童生徒を再生産しない未然防止に資する指導援助の工夫に加えて、不登校児童生徒一人一人とどのように関わり、彼らに必要な個に応じた指導援助や心理教育的援助サービスを提供して学校復帰させていくことも求められている。

それでは不登校児童生徒は、どのような指導援助や心理教育的援助サービスを求めているのであろうか。このことについて、文部科学省（2011）が実施した平成18年度の不登校生徒を対象とした不登校生徒に関する追跡調査研究会の報告書（2014）を手がかりとして検討していく。本調査結果では、「中学校3年生の時に受けていた主な支援」において「何も利用しなかったと回答した者は22.5%」であった。また、質問票の問7（中学校3年生時）・問17（卒業後）・問34（今後）における「次のような相談や手助けなどがあればいいのと思ったことがありますか」では10項目の選択肢の内、コミュニケーション、人間関係、相談、生活習慣づくり等を上位に挙げている。問27「中学校を卒業した頃と比べて現在の自分が成長したのはどんなところですか」では15の選択肢があり、自立、健康、生活、人間関係、他者理解、自信、情緒の安定、自己表現等の項目を上位に挙げている。それらの回答選択肢は、リアルな生活の中で、不登校児童生徒が必要としている指導援助や心理教育的援助サービスの視点を提供していると考えられる。

他方では、上述した文部科学省の追跡調査とは異なる合宿の効果に着目した研究成果が報告されている。ここでいう合宿とは、治療的關係だけに留まらず、参加児童生徒が多様なスタッフと生活を共にしながら様々な体験活動に主体的に取り組む宿泊体験活動である。以下、本稿において研究対象とする合宿は上述した不登校児童生徒の宿泊体験活動とする。

池田博和ら（1991）は、「登校拒否児の治療教育のために合宿を実施した」結果、「総じて、この合宿という特殊な状況の中で、彼らは普通では得られない新しい体験をしたとは言えるであろう。それは『世界への信頼』の萌芽となるものといってよい」こと、「この試みは彼らの内面的成長にとって有効であった」としている。また、池田博和・吉井健治ら（1992）は、不登校児童生徒が参加する合宿を「グループ体験を積極的に生かした、一つの心理発達促進的アプローチとして位置づけ」、このことを「ヨコ体験」としての意味から検討している。

開善塾教育相談研究所¹（2007）は、埼玉県教育委員会が実施した「民間の教育相談機関や近隣の大学、NPO7団体と協働してひきこもり型の不登校児童生徒を直接支援する体験活動事業」である「彩の国スーパーサマースクール事業」（2003）のプロジェクト委員として本事業の推進・実施に関わっている。本事業の成果は、参加者の「受容感」「有能感」「自己決定感」の獲得にあることが報告されているが、この背景には、安心できる居場所、素直に自分自身を表現できる場の保障、「みんなで何かをやることも楽しいことなんだ」「人と関わり合うこともいいものなんだ」という気持ちを味わえたことにあると分析されている。

兵庫県立但馬やまびこの郷（2013）では、学校復帰につながる要因の調査結果として、「スタッフとのつながりや信頼関係が持てた」「同年代の子とつながりが持てた」ことなど「人とつながりが持てたことから自信や次へのステップに向けた積極性が生まれている」と分析している。また、「認められた・褒められた」「応援してもらえた」ことにより「自己肯定感の向上が改善にむけての大きな要因であること」を挙げている。

以上の先行研究では、不登校児童生徒を対象とした合宿には、参加者の自信や自尊感情をはぐくむ効果、社会的自立に必要な資質を高める教育効果が見られると報告されている。これを踏まえ本研究では、不登校児童生徒を対象とした合宿に取り組んでいる「兵庫県立但馬やまびこの郷」（以下、「やまびこ」と表す。）のプログラムと、ひきこもり傾向の見られる青少年（不登校を含む）の家庭訪問及び合宿に30年以上取

り組み、不登校児童生徒の学校復帰に成果を挙げてきた「開善塾教育相談研究所」（以下、「開善塾」と表す。）の取組（家庭訪問と合宿）に着目し、そこでの心理教育的援助サービスに係る実践を研究対象として検証する。このことで、学校の教員が不登校対応において、「指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒」を増やしていくことに資する指導援助・心理教育的援助サービスのあり方について明らかにすることを目的とする。

2 調査対象

本研究の対象である合宿は、共に都市部から離れた山深い交通不便な地で実施されている。本研究ではまず、やまびこの合宿プログラム及び公表されている合宿の成果についての検討を行う。次に、開善塾が深く関わった「彩の国スーパーサマースクール事業」（2003）と、開善塾の家庭訪問及び合宿が参加者に与える効果について検証する。

2.1 兵庫県立但馬やまびこの郷について

やまびこは、兵庫県が「学校生活に適応しにくく、欠席しがちである子どもたちとその保護者を支え、励ますため、1996年に兵庫県朝来市に設立された施設」である。やまびこの宿泊体験活動の基本プログラムを表に示す。体験活動は、次の①から⑦で組まれている。

表 やまびこの宿泊体験プログラム

時刻	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
7.00		起床 朝食	起床 朝食	起床 朝食	起床 朝食
9.30		②料理を 作ろう	④自分で 選ぼう (製作・文化)	⑥遠くへ 出かけよう	⑦お別れ会
12.00	……	……	……	……	……
13.30	①出会い の集い お互いを 知ろう	③地域と 交流 しよう	⑤自分で 選ぼう (スポーツ)		
17.45	夕食 やまびこタイム (入浴)	夕食 やまびこタイム (入浴)	夕食 やまびこタイム (入浴)	夕食 やまびこタイム (入浴)	
22.00	就寝	就寝	就寝	就寝	

- ① 出会いの集い
- ② 協力しながらの昼食づくり
- ③ サイクリング・史跡見学・ものづくり体験等
- ④ プラ板・焼き板・七宝焼等の製作
- ⑤ 球技・インラインスケート・ボルダリング等
- ⑥ やまびこが所有するマイクロバスを利用して海・山・スキー・スケート等の四季折々の活動
- ⑦ お別れ会。

やまびこの宿泊体験活動のプログラムには、メンタルフレンド（学生ボランティア等）²の参加や、4泊5日の参加が難しい場合には、短縮参加や体験的参加も認められている。

2.2 開善塾教育相談研究所について

開善塾教育相談所は金澤純三氏（現在は顧問）が1983年に設立し、群馬県旧万場町、現在の神流町で不登校・ひきこもりの青少年のふれあい合宿や、登校をしづりがちな子どもの体験合宿等に取り組み現在に至っている。開善塾の合宿は、事前の家庭訪問から継続して参加するケースが多い。合宿期間は1泊から5泊までと不定である。これは、参加者に応じた合宿となるようにカスタマイズしているためである。そのため、合宿における体験活動は多様であるが、表に示したやまびこの②③④と重なる活動を中心として実施されることが多い。

開善塾の合宿では作ること、食べること、「仲間と同じ釜の飯を食う」ことを大切にしており、食事は準備段階の買い物から調理、会食、片付けまでを毎食行っている点に特徴が見られる。この点について、やまびこの食事がプログラム以外には調理スタッフにより提供されていることと大きな違いが見られる。

3 方法

本研究は、研究対象となる2つの教育相談施設に関わる執筆者らによるエスノグラフィー調査により得られた定性的データを分析していくことで、不登校児童生徒への効果的な対応に係る知見を見出そうとするものである。参与観察者は、第1筆者・第2筆者及びX年に第1筆者の研究室に所属していたゼミ生らである。第1筆者の研究室に所属していたゼミ生らは教育学を専攻し、いじめ問題や不登校、虐待等の学校臨床に関心を持つ学生や院生である。

第1筆者は、「兵庫県立但馬やまびこの郷サテライト事業」の運営協議会委員（副委員長）及び学生ボランティアであるメンタルフレンドを派遣する大学の窓口として、2012年度から2016年度の5年間にわたり、やまびこに関わってきた。第2筆者は開善塾の相談員・所長として、これまで30年近く家庭訪問及び合宿運営に取り組んでいる。

エスノグラフィー調査による参与観察では、以下の枠組みで定性的データを収集した。

集団生活における様々な活動場面における積極性、ノンバーバルを含めたコミュニケーションの応答、スタッフや参加者との人間関係の深まり、自己決定に係る言動、動作や表情の変容等に注目しながら記録をとり、文章化していく。

研究倫理上の留意点について、本稿では筆者らが関わった事例を検討していくが、取り上げる事例は守秘義務の遵守及びプライバシーへの配慮等から内容の特質を損ねない範囲において複数の事例を組合せたり、個人が特定されないように加工したりしている。また、事例の取り扱いについては、すでに公表されている事例もしくは参加者（児童生徒の場合にはその保護者を含む）からの同意を得ている事例に限定している。

4 結果

4.1 兵庫県立但馬やまびこの郷の合宿について

第1筆者が訪問したX年2月（水）のやまびこの状況や児童生徒の様子について述べる。

当日はやまびこのスタッフと一緒に活動するプログラムであるが、活動内容の選択は個々に委ねられていた。創作活動、文化活動、スポーツ活動等の種類は豊富に準備されており、参加者が希望する活動に応じてスタッフやメンタルフレンドが個別に対応していた。中にはグループで活動に取り組んでいる姿も見られた。そこでは、スタッフやメンタルフレンドが、個々の児童生徒に対して、それぞれの活動に没頭できるよう配慮した声かけや援助が行われていた。その中には、第1筆者のゼミの男子学生の姿を見ることができた。エスノグラフィー調査により得られた観察データにより、当時の応答について以下に記す。

参加者が自分で選ぶ製作活動は、初日の月曜日にとったアンケートの希望通りに分けられていた。しかしC（女子生徒）は、アンケートの時に「また後で決める」と言い、何も書かず提出していた。そのために、メンタルフレンドが「何やるの?」と聞いても、「何回も来てて全部やったからいいわ」と答えていた。その後、メンタルフレンドが何回か勧誘してみたが、「やらない」と変わらないため、メンタルフレンドは作業をしつつ、Cと話をすることにしていった。メンタルフレンドは他の参加者らと一緒にプラ板で自分の名札を作成した。プラ板を作りながらCと話をしていった。これまではCが他の参加者と話したいという様子が見られなかったため、Cと話すときはCだけ、他の参加者と話すときは他の参加者だけコミュニケーションをとっていたのであるが、この時には「Cちゃんはどう思う?」と会話に少しずつ入っていけるような支援を意図的に行っていることが見られた。Cに話をふると「私も」や「それは違うかな」など会話に入ろうとする姿を確認することができた。

また、メンタルフレンドがプラ板を作っているとき「首からぶらさげる紐、どうしょ?」とつぶや

くと、Cが「あの先生の紐、私が作ったんやで」と教えていた。それを聞いたスタッフが「そうやねん。すごい丈夫なんよ。ありがとうね」と返していたので、メンタルフレンドはそのやり取りを見て、「Cちゃん、俺のもつくって？」とお願いしていた。Cは「え～」と嫌そうな態度を示していたが、「お願い。Cちゃんが作ってくれた紐で名札ぶらさげて、やまびこの郷に来たいから作って」ともう一度お願いすると、Cは「仕方ないな。作ったろ」と言いつつ、メンタルフレンドのために紐を作成した。紐ができた後、Cに「ホンマにホンマにありがとう」とメンタルフレンドがお礼を言うと、照れくさそうに「別にええよ。また作ってあげるわ」と応えていた。

やまびこの宿泊体験活動では学習活動がほとんどなく、集団活動を通して対人関係能力を高めることに重点が置かれていた。また、活動の間には参加者との個人面談や、メンタルフレンド等との緊密な情報交換により、一人ひとりに応じた対応を考えている。

宿泊棟にある和室では、スタッフやメンタルフレンドと円状に座り自由な活動に取り組んでいる。当初は引率してきた保護者の後ろに隠れて保護者が代弁する児童生徒もいたようであるが、寝食を共にする中で自ら進んで参加者と関わろうとする姿勢が見られるようになっていた。

宿泊4日目（木）は、「遠くへ出かけよう」のプログラムである。第1筆者が訪問した日とは異なるが、第1筆者のゼミに所属する男子学生2名がメンタルフレンドとして参加して報告された4日目から最終日の活動報告書をエスノグラフィー調査として以下に引用する。

4日目は、登山を行い、兵庫県最高峰の氷ノ山に登ることになっていた。前日から、児童生徒とは氷ノ山の話で盛り上がっており、活動への期待感を感じていた。天候や気温などの心配はあったが、4日目の活動の目標は、主体性・社会性の育成を図ること、特に達成感・成熟感を体得することを目指していた。

登山コースまでバスで登るとそこには雪が残っており、その景色を見た児童生徒の気持ちが高ぶっていることを肌で感じる事ができた。しかしながら、実際に登ってみると、登山は思いの外厳しい活動であり、途中から「しんどい」「帰りたい」と声をもらす児童生徒がいた。ここで、これまでの活動の成果が最も輝く場面が見られた。

スタッフやメンタルフレンドが何を言っても聞かず諦めようとしていた児童生徒に対して、ある児童生徒がそばまで駆け寄り、「一緒に最後まで登ろう」と声をかけたのである。すると声を掛けられた児童生徒は嫌な顔をすることなく、自分のペースで歩き始めたのである。集団生活を苦手としてきた不登校の児童生徒にとって、取り残されそうな誰かに手を差し伸べることは非常に勇気のいる行動である。他人のことを気遣うことのできる優しさや仲間意識が育まれていることが確認できた場面であった。

さらに、この登山では予想していなかった出来事があった。何気ない日常会話をしていたとき、突然一人の児童生徒が「僕らはなんで不登校になったのか考えよう」という提案をしたのである。やまびこの活動に参加している間、不登校の話題を出すことはせず、触れてはいけないもののように考えていた。しかしながら、その児童生徒は、参加者全員の不登校になった理由を聞き、それについて全員で話し合う機会をつくったのである。その上、驚いたことに話を聞かれた全員が、不登校になった理由を自分なりに考えており、ためらうこともなく話していたのである。（中略）また、参加者の児童生徒が不登校である現在の自分の状況に対して、自分なりの考え方を持っており、それを人前で話すことができるということも、やまびこという環境だからこそのものであるように感じた。さらに、話が深まり、将来の自分の姿までイメージしている児童生徒がいたことにはより一層驚かされた。登山の最中に、まさかそのような話をすると予想していなかったことであるが、お互いの絆を深め合う姿を見ることができたのは、大きな価値があったと考えられる。（後略）。

最終日になると、児童生徒の集団としての意識が非常に高まり、強い団結力をみせる場面が日常的に見られるようになっていた。最終日は、前日の氷ノ山の登山は帰りが遅くなったため、靴や汚れたものを洗濯する活動が導入された。靴を洗う時には、自分の分が早く終わると、自ら率先してスタッフの分や体調が悪い児童生徒の分を磨いている姿が見られた。清掃の時間も、自分が与えられた役割を終えると友人の清掃場所を手伝いに行き、いたるところで他者に対する思いやりを見ることができた。また、内気な児童生徒も、今回のやまびこの郷の活動について聞くと、明るく笑顔で充実していたと回答していたことから、やまびこのプログラムが非常に充実したものであることを確認することができたのである。

第1筆者は、やまびこに出張する業務や研究に加え、前述してきたようにメンタルフレンドを多数送り出してきた。やまびこでの実習を終えた学生たちとは定期的にふり返りの場を設けてきたが、そこでは共通して以下のような感想を聞くことができた。

やまびこで出会った不登校の児童生徒は、どこにでもいる「ふつうの子ども」であるように感じられ、「本当にこの子たちが不登校なのか」という印象を受ける場面が多かった。また、やまびこでは「児童生徒のできないことを批判するのではなく、それまでの過程においてできたことや、できることを積極的に評価する児童生徒理解の姿勢」を重視しており、このことが印象に強く残っている。このような姿勢で児童生徒と関わることは、児童生徒が安心感を得ることや自信をもつことにつながり、次にできなかったことに挑戦して、成長する意欲にもなると感じた。

以上の観察や、やまびこでの経験、学生たちからの報告、やまびこの報告書等によると、やまびこの宿泊体験活動に参加することができた不登校児童生徒らの多くは、原籍校への復帰を果たすケースや、復帰が叶わなくても卒業後には進学し、その後は社会的自立及び自己実現を達成している利用者の多いことを確認している。このことから、「法」が施行されたことに伴い、学校復帰が不登校児童生徒の最終的なゴールではなくなったが、合宿には卒業後の社会的自立に資する教育的意義が示唆される。

次に、「彩の国スーパーサマースクール事業」（2003）と、不登校の状態が長期化しており合宿に参加することが困難なケースに取り組んでいる開善塾の取り組みについて述べる。

4.2 開善塾教育相談所の家庭訪問・ふれあい合宿について

(1) 彩の国スーパーサマースクール事業

埼玉県教育庁主催の不登校児童生徒のための合宿（彩の国スーパーサマースクール）が2003年から2年間施行され、その後は民間委託となった。初回の合宿には、第1筆者・第2筆者共に関わったが、特に第2筆者は、どのように不登校児童生徒の合宿参加を実現させるかという入り口論から、プログラム内容を検討する企画会議の主要な委員であった。

参加の実現に向けては、「学級担任がスーパーサマースクールのチラシを持って家庭訪問をする」、これが最も重要なことであった。しかしながら2週間という長丁場の企画であったため、はじめから無理ではないかと思ってしまう学校関係者が多く見られた。企画側の第2筆者としては、参加できるかできないかということを大人側が危ぶむよりも、とにかく学級担任がチラシを持って不登校の児童生徒に会いに行く、会えなくても保護者に合宿を開催することを知ってもらい、そして児童生徒に会えたら、とにかく誘ってみることに重きを置いたのである。この「担任による家庭訪問」という試みに関しては、不登校に関わる仕事に携わる委員は同じ思いを共有していた。

他方、教員の中には、家庭訪問をしたら児童生徒が嫌がるのではないかと考える者も少なからず存在していた。しかし、第2筆者のように不登校児童生徒に関わる相談業務をしている者は、何度も家庭訪問を

行うことで何とか不登校児童生徒との人間関係をつくることの大切さを痛感しており、また、不登校児童生徒が求めているのは、やはり学校の担任の先生であることを確信していた。本合宿（彩の国スーパーサマースクール）は、最終的に20人の児童生徒が申し込みをした。これは学級担任の家庭訪問の成果である。本合宿はそれまで長期欠席をしてしまった児童生徒にとって夏休みをどのように過ごすかが2学期の再登校への布石となる。合宿は生活習慣を整えるための役割を担うとともに心理教育的援助サービスを提供する場となっている。

なお、本稿ではこの合宿の成果及び課題については紙面の都合により割愛する。詳細は公表されている報告書や関係者が発表した論文等を参照されたい。

（2）開善塾教育相談研究所の家庭訪問と合宿へのアプローチ

宿泊体験活動などの確定している情報はなるべく早く知らせておく方が、児童生徒に考える時間が生じる。児童生徒との人間関係が信頼関係に変わってから合宿に誘うという考え方もあるが、合宿のチラシを見せて「こんなものがあるよ」と知ってもらう事は早い方が望ましい。その時点で関心のある素振りを見せようとしないこともある。「虫は苦手」「泊りは無理」等の否定的な言葉しか口に出さなかったとしても、その後、気持ちが変わることも少なくない。「このままではいけない」「変わりたい」と願いながら、どうしようかと悩む児童生徒もいる。迷ったあげく自分の中で踏み切りを付けて参加する児童生徒もいる。

注意すべきことは、児童生徒よりも先に保護者が熱心になってしまうことである。保護者が「参加した方がいい」「これには参加してほしい」と熱望すると、児童生徒は途端にしり込みするケースが多い。それは失敗が怖いからである。家の中で長期間過ごしてきた児童生徒は、例えばチラシに書かれている花火や星空観察などに興味を示すこともあるが、他の児童生徒らと過ごすことには及び腰になりがちである。仲間と過ごした楽しい体験が少ない者が多いからであろう。それゆえ必要以上に保護者が熱心になってしまうと、失敗を恐れる児童生徒の参加意欲は下がってしまうことを教員側は肝に銘じるべきである。

不登校児童生徒の特徴として、失敗を恐れる気持ちが強いことを忘れてはいけない。これは自己肯定感が低いことと関連していると思われるが、軽く誘っていくことが肝要である。その際、一人一人の興味関心を引き出す口説き文句が重要である。例えば、料理に興味がありパンが大好きな者には「フランスパンを焼いたことがある？ よかったら教えてあげるからやってみないか？」、動物に興味がある者には「運がよかったらカモシカが見られるよ。サルにも会えるかも。」、昆虫だったら「蛍を探しに行こう」「カブトムシの幼虫を見つけよう」等。中には、昆虫は嫌いな生徒に、「〈てんさい〉という蛾を見つけて繭を作らせることができたなら高級な絹糸が採れる」と話したところ、自ら蛾の採集に出掛けるようになった者もいる。その生徒はビジネスに興味があったのである。このように、その児童生徒が何に興味を持ち、どんな誘い方であれば心が惹かれるか、一人一人の特性を考えた上で誘っていくことが大切なのである。

大学生以上のひきこもりの青年を家庭訪問する際には、不登校児童生徒の合宿のボランティアに来てもらえないかと誘うこともある。「年下の子どもは苦手」「そんなことは自分に到底無理だ」等、否定的返答が多いものの手伝ってもらえないかという声のかけ方は大事である。元来、人は他の人の役に立ちたいという思いを持っている。ひきこもる青少年は、真面目な者が多く、信頼関係が育つと、「自分でよければ、合宿を手伝いに行ってみようか」と考えるようになる者が多い。合宿において自然に年少者の面倒をみることにより自信が生まれ、自分自身の課題と向き合う覚悟が育っていく。それも寝食を共にする合宿形式であると、助け合う場面はいつでもどこでも生じるという利点に基づいている。

（3）開善塾教育相談研究所の合宿事例（中学3年生・女子）

Dは中学校1年の2学期から学校を休んでいる。そのきっかけは、部活動での女子同士の人間関係にあった。学級担任兼顧問（30代男性教諭）は、女子生徒の人間関係への介入が苦手であり上手く指導できなかった。また、家庭訪問を繰り返したが、Dから会うことを拒否され、ついには母親にも訪問を断られてしまったため足が遠のき、Dとの関わりが切れてしまったという。

Dの家族構成は、両親、父方の祖父母、姉の6人家族。Dは不登校になってから、家族以外の人と会う

事なく毎日を送っていたが、しっかり者の姉が面倒をよく見ていたため、不登校状態についてあまり疑問を持つことなく3年生となっていた。しかし、姉と外出しようとするとうちを出てすぐ気分が悪くなり帰宅するということを繰り返すうちにすっかり自信をなくしてしまった。

第2筆者が初めて家庭訪問をした際には緊張のあまり声が出ず目には涙がたまっていた（後に、この時は「勇気を振り絞って会った」ことをDが話してくれた）。そこで第2筆者は、「願い事は何か」を紙に書いてくれるよう頼んでみた。するとDは、「高校に行きたい」と小さく書くやいなや、それを傍線で消し、「外に出られるようになりたい」と書き直したのである。この日から昼夜逆転していたDの家庭訪問が始まった。

会話は難しかったため、一緒に部屋で漫画を読むことが多かった。Dが薦めてくれる漫画を読んだりして過ごしたが、その内容について話すことはしなかった。Dは肩こりや不眠に悩んでいたが、第2筆者のマッサージを受けることで、両者の人間関係は自然に信頼関係に変わり、夜、一緒に車で外出できるようになった。課題は極度の車酔いであったが短いドライブを重ね、少しずつドライブに慣れるように練習を重ねていった。

Dには早いうちから合宿の話をし、「よかったら行ってみないか」と誘っていた。それは、Dに家を離れて過ごす経験を積ませたかったのである。祖母、母、姉と家の中にはまるで3人の母親が存在するような状態でDの世話を焼いていた。特に姉の影響は大きく、Dは自分のことを自分で決めることができなかったのである。

第2筆者が家庭訪問をするようになって、初めて、Dだけのための来客が存在するようになった。家庭訪問の回数を重ねる毎にDの動きがよくなってきた。その頃、第2筆者は、家庭訪問度の度にお菓子が出されることで体重増加が著しかった悩みをDに打ち明けたところ、母親たちに「お菓子は用意しないで」と言ってくれたのである。Dは第2筆者のために、はっきりと断ってくれたのである。その後間もなくして合宿に誘うと、「行ってみたい」という応えが返ってきた。

一度目は迎えに行く約束もしたが、当日の朝になって急にしり込みをし、出かけることができなかった。かなり落ち込んだDであったが、家庭訪問を繰り返したところ、再び元気を取り戻し、合宿に参加することができた。その際には、通常の3倍の移動時間をかけて合宿所に到着した。Dは酔い止め薬を服用したがあまり効果がなく、途中では何度も車を停めて休憩をとった。すっかり気落ちした様子だったが、合宿所で出会った中学校2年生の女子、高校1年生の女子からおしゃれな服装を褒められ、Dの気持ちは一変したのである。その後Dは合宿経験を重ね、公立高校に合格。自ら選んだスーツで入学式に出席した。

5 考察

岡本ら（2011）は、不登校児童生徒が参加した自然体験活動について「対人関係の広がり、他者への信頼、活力源、癒し・安心、日常の支え等として意味づけていること」及び「不登校後半期において、外界とつながる体験や適度な高さのハードルとして有効であることが示唆された」ことを報告している。このことは、第1筆者及びメンタルフレンドによるフィールドワークで得られた観察結果と重なる点である。また、やまびこは2015年10月25日に開催した「20周年事業（やまびこフェスタ）」に関する会見資料の中で、以下の「利用者の声」を紹介しているが、その内容は岡本ら（2011）が報告した視点からも理解することができる。

ア 児童生徒

- ・やまびこの郷に来ることでいろんな人と出会って笑顔になれるし、元気になれるので、生きていく上で良い経験になったと思います。
- ・みんなにいろいろな場面で助けてもらうことがあった。周りの人がいてくれて安心して過ごせてい

と感じた。今週はできなかったけど、次に来たときは、人の役に立つことにチャレンジしてみたいです。

イ 保護者

- ・やまびこの郷の先生方の支えがなければ、今の娘の姿はなかったと思います。感謝の気持ちしかありません。娘も「行って良かった。行ってなかったら今こんな風にはなってないと思う。」とっておりました。大事な居場所だったと思います。
- ・出会いの場所であり、同じ境遇の人とかかわり、とてもやまびこの郷での宿泊を楽しんでいます。本当の自分が発見できる場所でもあるようです。上手くいかないこともあるようですが、楽しいことが多いらしく毎回楽しみで仕方がない様子です。

やまびこ（2013・2014）は、宿泊体験活動以外にも不登校に係る調査研究に取り組んでいる。その中で、「学校復帰につながる要因」として次の3点を挙げている。

- ① 信頼できる人や同世代の子とつながりが持てることが精神的な安定や自信となる。
- ② 認められた・褒められた・応援してもらえたなどの支援によって自己肯定感が向上する。
- ③ 自己選択・自己決定することによって自尊感情が育まれる。

以上の3点は、やまびこの宿泊体験活動によりはぐくまれる資質・能力であると考えられる。しかし、それらは、やまびこにまで辿り着けた児童生徒に提供される心理教育的援助サービスであり、家から出られない者には提供されることがないという現状が見られる。これに対して、開善塾のケースでは数年に渡り引きこもっていた青少年が学校や社会への復帰を遂げた後の予後がよいのも、家庭訪問と合宿を組み合わせた結果ではないかと考えられている。この意味において、長年にわたり不登校・ひきこもりの青少年への家庭訪問と合宿を行ってきた開善塾の対応は、学校の教員が行う家庭訪問に対して示唆的である。

阪根（2009）は不登校児童生徒の回復力育成のポイントは、自尊感情を高めること、共感性を育てること、集団生活における軋轢に対処できるコミュニケーションスキルを教えること等を挙げた上で、保護者や教員などの周りの大人が介在することの大切さ及び安定した家庭環境が基盤になると指摘している。このことは、本稿で論じてきた合宿の場が児童生徒にとって安心・安定した環境となっており、生活を通しながら児童生徒の自尊感情や共感性を育てることにつながっている。まさに「生活が陶冶する」³のである。また、児童生徒の「社会性の育ちそびれ」⁴に視点を当てるならば、集団生活に必要な対人関係スキルである聞くスキル、主張スキル、問題解決スキルなどを育てる場にもなっていることが推察できる。

新型コロナ禍の下、日本全国各地の学校で不登校数が増えているとの報告を聞く。また一方で、マスク着用や制限された学校での活動が追い風となり不登校児童生徒が登校できるようになったという事例も聞く。

しかし、第2筆者による教職員との面談からは、完全に学校と切り離された生活を送る児童生徒達の学校復帰を難しいと考え、あきらめてしまうケースが多いことを痛感する。「あまりにも長く休んだため、授業についていけない」「朝起きることができない」「騒がしい教室に居ることができない」「友人がいない」といったあきらめる理由が多く挙がる。しかし、家庭訪問を繰り返し、その上で、本稿で対象としたような合宿に参加し、小集団での寝食を共にする活動を提供することで、教室復帰へのハードルを越える力をはぐくめる可能性があることを提言し、本稿を終える。

付記：本論文の執筆は、第2筆者と第1筆者がそれぞれのフィールドワークで得られた定性的なデータについての意見交換及び協議を経て論考を整え、相互対等な立場で協働的に推敲を重ねて完成させたものである。

引用・参考文献

- 1) e-Stat 政府統計の総合窓口 統計で見る日本 (参照日 2021/08/28).
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=3&layout=dataset&toukei=00400304&metadata=1&data=1>
- 2) 文部科学省 (2020) 「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」.
- 3) 不登校生徒に関する追跡調査研究会 (2014) 「不登校に関する実態調査 平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書」.
- 4) 池田博和・吉井健治 (1991) 「登校拒否に関する研究 (第 V 報) -不登校生徒の合宿体験-」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』 38,137-154.
- 5) 池田博和・吉井健治・桐山雅子・長野郁也・石田智雄・長峰伸治 (1992) 「不登校生徒の合宿体験-「ヨコ体験」合宿のこころみ-」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』 39,45-61.
- 6) 兵庫県立但馬やまびこの郷 (2011) 「平成 22 年度但馬やまびこの郷サテライト事業 (問題行動を抱える子ども等の自立支援に関する調査研究) 利用者アンケート (追加調査) 調査報告書」. (2013) 「学校復帰につながる要因の調査研究」. (2014) 「平成 26 年度サテライト事業 (学校復帰につながる要因の調査研究 平成 25 年度利用者追跡調査より抜粋) 調査報告書」. (2015) 「兵庫県立但馬やまびこの郷 20 周年事業 (やまびこフェスタ)」 (参照日 2021/9/1) [g_kaiken20151013_05](#)
- 7) 埼玉県教育委員会 (2004) 「平成 15 年度彩の国スーパーサマースクール事業報告書」.
- 8) 開善塾教育相談研究所 (2007) 『学校復帰をめざして 家庭・学校・専門機関等との連携』 学事出版、pp.128-138.
- 9) 石隈利紀 (1999) 『学校心理学』 誠信書房.
- 10) 岡本祐子・小嶋由香・馴田佳央 (2011) 「自然体験活動が不登校経験者の発達に及ぼす影響と意味づけ」『広島大学心理学研究』 (11), pp.189-199.
- 11) 阪根健二 (2009) 「レジリエンスを高めるポイント」『児童心理 4 月号』 第 63 巻第 5 号, 金子書房.
- 12) 中村豊 (2013) 『子どもの基礎的人間力養成のための積極的生徒指導-児童生徒における「社会性の育ちそびれ」の考察』 学事出版.

【註】

¹ 開善塾教育相談研究所は民間団体であるが、近年に至るまで文部科学省の各種事業を委託されている。その一端を以下に示す。

- ・生徒指導・進路指導総合推進事業 (途中、文部科学省「いじめ対策等生徒指導推進事業」に名称変更) 実践研究委託団体 (平成 17、18、20～28、30 年度、令和元年度)
- ・同事業の学校教育における長期宿泊体験活動の導入促進に関する調査部門の実践研究委託団体 (平成 30 年～令和元年)

本事業では、昭和 63 年より、毎年夏季休暇において、2泊3日の教育相談実技研修会を企画開催。但馬やまびこの郷のスタッフの参加や、開善塾スタッフが但馬やまびこの郷での研修講師として招かれる等の交流を行った。この研修会は平成 25 年度より独立行政法人国立青少年教育振興機構との協力の元、教員免許状更新講習を兼ねる研修プログラムとして開催している。また、自治体の教育委員会委員や文部科学省が設置する各種委員会委員などの公職も数多く務めてきた実績がある。

² メンタルフレンドとは、児童生徒の体験活動を支援する学生ボランティアの名称である。兵庫県立但馬やまびこの郷のホームページによれば以下のように記されている。(参照日 2021/12/01) http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/volunteers/mental_friend/
応募資格

将来、教員やカウンセラー、福祉士等を目指す学生、及び児童生徒のメンタルフレンドとして活動支援に関心のある者で、以下のいずれかに該当する者

- (1) 兵庫県内に所在地がある大学または大学院に在籍する学生
- (2) 兵庫県出身者で、他府県の大学または大学院に在籍する学生
- (3) 大学または大学院に在籍し、当所での実習経験がある学生
- (4) (1)～(3)のいずれかの条件を満たす、大学または大学院を卒業・修了後、当所での活動を希望する者（ただし、期間は卒業・修了後5年以内とする）

活動について

- (1) 活動内容：児童生徒の体験活動の支援
- (2) 活動場所：但馬やまびこの郷（活動プログラムで利用する場所を含む）、または「地域やまびこ教室」を開催する県内5会場
- (3) 活動日数
 - ・但馬やまびこの郷での宿泊体験活動…4泊5日以内（日数は相談）
 - ・県内各地で実施する「地域やまびこ教室」…1泊2日又は1日

³ Johann Heinrich Pestalozzi *Schwanen Gesang*, 1826 / 佐藤正夫（訳）（1959）『白鳥の歌』玉川大学出版部.

⁴ 中村豊（2013）『子どもの基礎的人間力養成のための積極的生徒指導-児童生徒における「社会性の育ちそびれ」の考察』学事出版.

